様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 22 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：新学術領域研究
研究期間：2008～2012
課題番号：２０１０１００６
研究課題名（和文）国家の輪郭と越境

研究課題名（英文）Beyond the Contours of State

研究代表者
山根　聡（YAMANE　SO）
大阪大学世界言語研究センター・教授
研究者番号：８０２８３８３６

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：地域大国、国家、マイノリティ、移民、越境、国際研究者交流、多国籍

１．研究計画の概要

（1）本研究計画の目的

本研究の目的は、インド、ロシア、中国の３国をユーラシアにおいて一定の影響力を及ぼす「地域大国」と設定し、これらの国家の「大国」たるゆえんを、特にディアスポラ、様々なネットワーク、マイノリティなど社会の諸側面から考察することにある。ディアスポラやマイノリティなどは、大国にとって「周縁」の存在であるが、本研究は、それがかえって大国の輪郭を浮き彫りにしていることに着目し、国家の輪郭を超え、それに挑戦する様々な共同体のあり方を通して、地域大国像を照射することは地域大国論において重要な研究手法であるとの認識に立っている。国家の枠組みを超越することが、かえって国家を際立たせ、地域大国像の本質に迫ることができると考えるためである。さらに、インド、ロシア、中国の３国をこのような視点から比較検討することは、国家像の再検討に迫るものと確信している。

（2）本研究の進め方

そこで本研究では、ネイションと宗教の相互関係やその変容、ディアスポラとそのネットワーク、あるいは国家のマイノリティ問題に見られる国民統合の問題を研究テーマに設定し、これにより、地域大国及びその周縁で発生する民族問題や紛争について、新たな知見を提供することを目的として研究を進めている。研究はまず実地調査と内外の研究者との連携の実践により地域大国論に関する議論を深め、本プロジェクトの他の研究グループとの共同による国際シンポジウムやセミナー、研究会等を開催することによって、異なるディシプリンの研究者の融合による地域大国像の解明に努める。

２．研究の進捗状況

平成 21 年度から 23 年度までに、国際シンポジウムを１回主催し、国際セミナーを５回、研究会を 11 回、研究打ち合わせを５回開催してきた。これらには他の研究グループとの共催も含まれ、研究者間の交流も活発に行っている。

研究分担者および連携研究者は、インド、中国、アルメニア、イギリス等へそれぞれ出張し、関連資料を多数入手した。出張については、随時本研究課題のウェブサイトで報告を行っている。実地調査では、モスクワ、北京、デリーなどへ留学する外国人留学生に着目し、地域大国を裏付けるソフトパワーとしての教育について基礎的な調査を行うなど、この研究計画によってこそ成り立ちえた、新たな研究テーマを設定することができた。

さらに、平成 22 年度に主催した国際シンポジウム「回帰と拡散～地域大国における人間の移動と越境」では、「聖地巡礼：信仰と消費」「故郷を遠くで想う：ディアスポラへの招待」「モバイル・ビジネスマン：商業ディアスポラとネットワーク」「知識の拡散：エリート養成と国家の輪郭形成」「周縁からの問いかけ」「移動がもたらすもの」の計 6 セッションを企画し、内外の第一線で活躍する研究者を交えて、ロシア、インド、中国の周縁的存在から見た比較研究を行った。シンポジウムには初日 75 名、2 日目 65 名の参加者があり、使用言語は英語とした。いずれの報告も刺激的で、地域大国像を異なるアプローチによって検討することができた。分野や地域の異なる報告は、地域大国の輪郭形成を

比較研究する上で、その視点を広げる有意義なものとなった。
　さらに、平成 22 年 12 月に開催されたイスラーム地域研究京都国際会議でも「Islamic Homelands inside Regional Powers」のセッションを担当し、地域大国内のムスリムの動向について報告を行った。参加者からも 3 地域大国の比較という新たな手法に対し高い評価を得たことは、本研究が着実に成果を挙げていることを示している。上記の研究会やシンポジウムのみならず、国際会議等でも積極的に報告を行っている。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
理由：本研究にかかる調査と、その成果は国際学会や論文、著作発表等に反映されている。また国際シンポジウム主催や研究会共催など、内外の研究者との研究交流を深めており、研究は順調に進展している。

４．今後の研究の推進方策
　今後は、本研究の最終成果を刊行するべく、研究の総括に向けて活動する。研究会開催や調査出張等を通して研究活動を続けつつ、学会や国際会議等での成果報告に重点を置くこととする。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 28 件）
①王柯、国民国家与民族問題―関於于中国近代以来民族問題的歴史思考、民族学与社会学通訊、第 60 期、1-8 頁、2010 年、査読有
②岡奈津子、同胞の「帰還」―カザフスタンにおける在外カザフ人呼び寄せ政策、アジア経済、51 巻 6 号、2-23 頁、2010 年、査読有
③山根聡、Sounds of Difference: A Study on Urdu Orthography in the Beginning of the Nineteenth Century、International Journal of South Asian Studies、vol.2、59-85 頁、2009 年、査読有
④長縄宣博、帝政ロシア末期のワクフ：ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアを中心に、イスラム世界、73 号、1-27 頁、2009 年、査読有
⑤吉村貴之、パリ講和会議とアルメニア問題、現代史研究、54 巻、35-51 頁、2008 年、査読有

〔学会発表〕（計 27 件）
①吉村貴之、第二次大戦後のアルメニア人帰還運動、国際中東欧学会（ICCEES）第8回世界大会、2010年7月30日、ストックホルム市会議場・スウェーデン
②小松久恵、Speaking about Desi:The Sense of Belonging in Contemporary British-Asian Writers、北海道大学スラブ研究センター 2010 年夏期国際シンポジウム、2010年7月9日、北海道大学・北海道札幌市
③山口昭彦、Shāh Tahmāsb's Kurdish Policy、The Eighth Biennial Conference of the International Society for Iranian Studies、2010 年 5 月 29 日、Doubletree Guest Suites、サンタ・モニカ市・米国
④大石高志、Workmen, Machines, Schemes Shifted from Japan to India:Mobility of Labour Intensive Production in the Cases of Matches and Glass wares, 1900-1940”、XVth World Economic History Congress (International Economic History Association)、2009 年 8 月 6 日、The Utrecht University・オランダ・ユトレヒト
⑤長縄宣博、Challenge and Leverage: Muslim Travelers from the Volga-Ural Region to the Ottoman Empire at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries、The 42nd annual meeting of the Middle East Studies Association、2008年11月25日、ワシントン D.C.・米国

〔図書〕（計 17 件）
①桜井啓子　Fariba Adelkha(ed.) 山根聡、Routledge、The Moral Economy of the Madrasa、2011 年、11-31 頁
②長縄宣博 D.M. Usmanova, 濱本真実（編著）、ロシア科学アカデミー出版社 «Vostochnaia Literatura» 、Волго-Уральский регион в имперском пространстве: XVIII-XX вв.（印刷中）、2011 年、343 頁
③小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか(編著)・シンジルト、勉誠出版、中国における社会主義的近代化：宗教・消費・エスニシティ、2010 年、185-217 頁
④NASAYOSHI NAKAWO, 小長谷有紀・シンジルト(ed.)、Peter Lang、Ecological Migration: Environmental Policy in China、2010 年、11-39・223-240 頁
⑤吉村貴之、東洋書店、アルメニア近現代史、2009 年、64 頁

〔その他〕
ホームページ
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_05/index.html